
桜並木

深月姫季

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜並木

【Nコード】

N0080C

【作者名】

深月姫季

【あらすじ】

新一と蘭の中学校卒業式当日の、朝のお話。桜の下、春の香り。

「ふあああ…」

新一の大あくびに、隣を歩いていた蘭が少しふてくされた。

「どうせ、また夜遅くまでホームズ読んでたんでしょう？」

「ああ… ホームズはすげーよ、やっぱり… ライヘンバッハの滝でー」

蘭は墓穴を掘った己のミスに気付いた。

とにかく、この幼馴染はホームズのことになると話が止まらないのだ。

慌てて、話題を変える。

「そう言えば、今日新一のお父さんとお母さん、来るの？」

今日は、義務教育最後の日。

二人はきちんと正装をしていた。

ほとんどの生徒が同じ高校に進学する為、あまり哀しいという感傷はない。

新一は話を遮られても大して怒った風でなく、特に興味なさげに答えた。

「ああ、俺は別に来なくていいっていったんだけど、母さんが来るって聞かないからな… 蘭のトコは来るのか？」

母親が出て行って別居中の蘭を気遣うように尋ねる。

「うん、電話で喧嘩してたけど。
お父さんはお前は来るなって言ってるし、
お母さんは行くって譲らないし。
結局2人で来るみたい」

「…今日で卒業、か」

「うん…」

遠くに見える校舎を見て、新一がしみじみと呟いた。
蘭は3年間自分を見守ってくれた、
大好きな桜並木の下で深呼吸した。

弥生の末。

今年は暖冬のせいか、
珍しい事に桜が既に満開を迎えている。

強風に煽られて、蘭の髪が流れるように靡く。

髪の毛を払うと、青空が一面に広がって、
アスファルトの上には、

薄桃色の桜の花びらが、自然のカーペットを作っていた。

蘭はしばらくその幻想的な世界に見とれていた。
桜同士が擦れ合い、サワサワと音を立て、
風が悪戯に花びらを舞い上げる。

「おい、蘭、何止まってんだよ」

隣を歩いていたはずの幼馴染が、
数メートル前方で痺れを切らしたように声を張り上げた。

「新一もおいでよ。」

「ここ、桜が舞っててすごく綺麗だよ」

「バーロー、残念ながら、んな暇ねーよ。
遅刻するぞ、卒業式」

その言葉に蘭は反射的に時計を見た。

「あつ… いっけない…」

集合時間が十分後に迫っていた。
この桜並木から、どう急いでも七、八分は掛かってしまう。

「ほら、走るぞ」

タタツと駆け戻ってきた新一に
手を掴まれて、

蘭の頬が紅潮する。

新一の顔をチラリと見ても、
あっちには照れる様子が無いのを、
少しもどかしく感じた。

「ちょ、ちよつと新一」

「ほら、早く早く」

本当は新一の方は、
必死にポーカーフェイスを装っていたのだが。

二人は桜の中を走りながら、
それぞれに頬を綻ばせていた。

お互いが、まだ告げることの出来ない感情。
お互いを、特別に思いやる気持ち。

それはまだ、幼く、恋愛に疎い二人は気付かないけれど。
それでも二人は、既に心の奥、深いところで繋がっているのかもしれない。

いつか、二人手を繋いで、
この桜を見えたらいいな、
蘭はひそかにそう思った。
そしてきつと新一も…。

幼馴染は、まだしばらく卒業できそうに無いけど、
二人の心は、桜のおかげで満たされていた。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0080c/>

桜並木

2010年10月15日23時09分発行